「他者」を包摂する歴史の創造

――シンガポール人三世代による歴史記述を読む――

奥　村　み　さ

むかしむかし、そこには木しか生えていなかった
まあ、ライオンの一匹か、二匹が、そよ風を楽しんでいたとさ
ある晴れた日、そこへ船がやってきて
人間が住むことになったんだ
“ラサ・サヤン”ディック・リー作詞[1]

はじめに

第二次世界大戦後、西洋諸国による植民地支配から政治的独立を果たした多くの新興国家は、宗主国との軍事的対立はいうに及ばず、文化的にもかつての宗主国文化に対抗し、その地域の伝統文化を国民文化として掲げて、抵抗運動を展開し独立を果たした。宗主国に対する強烈なナショナリズムが独立運動を支え、独立後の国家建設、国民統合の精神的支柱となってきた。その過程で独立運動の英雄神話、サーガ（建国物語）が生まれ、国民共有の物語として「想像の共同体」を維持してきたのである。

しかし、シンガポールの場合は、140年に渡りこの地域を支配してきたイギリスとは、政治的な交渉過程には困難を伴いはしたが、他の旧植民地のような熾烈な独立戦争を戦うことなく、政権の委譲が行われた。この独立過程は独立後、旧宗主国との関係においても大きな影響を及ぼし、一般的に想像される旧植民地国家のポストコロニアルな国民文化創造過程とは異なる形で国民文化が創造される要因のひとつとなっているのである。

本論では、まず、シンガポールの公的な歴史に関する英語での記述を三種類取り上げ、そこに描かれた「旧宗主国文化」と「植民者」に関する言説を比較検討する。特に同じ「植民者」でありながら、イギリスと日本に対する扱い方の違いに注目する。

事例として取り上げるのは、シンガポールの三世代が英語で記述したシンガポール史である。シンガポール史は数多く書かれているが、この三冊を取り上げたのは、いずれも公的性格を帯びたテキストであり、かつ異なる世代の著者による記述であることから、世代間の歴史観の共通点、相違点を比較するのに適切なテキストと考えたからである。いうまでもなく、この三冊が全ての個々人のシンガポール人の史観を代表している訳ではない。

シンガポールでは人口を年代的に大きく三世代に分類している。第一世代は独立運動に参加した世代、第二世代は現在のシンガポール社会を政治的・経済的に中心となって運営している世代、第三世代とは1965年の独立後に誕生した世代である。

本論では、第一世代の公的歴史記述の代表としてはリー・クアンユーの *The Singapore Story*（邦訳『リー・クアンユー回顧録』）をあげる。リーの回顧録が果して私的記録なのか、公的な記録なのかというのは議論が分かれる点だが、本論では、シンガポールで大ベストセラーとなったこの本の社会的影響力の強さを考え、公的性格を持つ、と解釈した。第二世代の公的歴史記述としては、政府発行の年鑑を、そして第三世代の公的歴史記述としては、第三世代の著者による高校の歴史の教科書を取り上げる。

特に英語で書かれた歴史を扱うのは、シンガポールにおける公教育、行政の場での公用語として英語が使用されていることから、英語で書かれた歴史観がシンガポールの公的歴史観として解釈する事ができるからである。

第一章　シンガポールにおけるポストコロニアルの意味

植民地時代を経験したシンガポールにおけるポストコロニアルな歴史記述とはいかなるものか？

ポストコロニアル批評の分野では、インドのサバルタン研究が有名である。ポストモダン研究とマルクス主義の影響を受けたインドにおけるポストコロニアル研究は、植民者と被植民者の立場を明確に分離し、相互を「他者」として対峙させる。その影響を受けたポストコロニアル研究のなかには、植民者と被植民者との関係を二項対立の関係として静的にとらえ、独立後の国民文化は植民地文化との対決のうえに成立する、と論じるものも多い。

しかし、現在のシンガポール文化を理解するには、このような二項対立的な見方は適切ではない。シンガポールの場合は、コロニアル文化を全て否定的に捉えるのではなく、ある部分は肯定的に評価している。シンガポールにおいては、少なくとも公的には、イギリス植民地時代は否定すべき「屈辱に満ちた過去」ではなく、シンガポール史の時系列的な歴史的段階のひとつとしてイギリス植民地時代を捉えているのである。

本論におけるシンガポールにおけるポストコロニアリズムの特徴は以下の二点に集約される。

1. シンガポールにおけるポストコロニアリズムは、植民地文化との決別によって成立する「脱」植民地文化としてではなく、植民地時代の文化からの連続体として、植民地時代「以後」の文化として時系列的な流れの中で捉えることができる。
2. 「以後」といっても、単系的にひとつの時代が終わって、次の時代が現れる、というのではなく、歴史的に形成されてきた多文化は常に重層性を持ち、かつ共時的に併存しているのである。その中で、旧植民地文化は現在においてもシンガポー

ル社会で併存している文化のひとつであり、現在のポストコロニアル・シンガポールにおいては、旧植民地文化にも正統性を与えていることが特徴的である。

たとえば、ここでひとつ可視的な形で植民地文化に正統性を与えている事例をあげたい。1990年、独立25周年記念イベントで、シンガポールの歴史を回顧するミュージカル仕立てのショーを見た。その中で、イギリス統治時代は、男性はフロック・コートにシルク・ハット、女性はバッスル・スタイルのドレスにパラソルといった、ヴィクトリア朝のファッションに身を包んだ華人系ダンサーたちが、ヴィクトリア・ウォークらしき背景の前で、そぞろ歩きをしたり、踊ったりするシーンに代表されていた。

このシーンが宗主国による文化帝国主義という敵対的な扱いではなく、シンガポールの歴史的風俗の一部という形で好意的に扱われていたことに注目したい。「被植民者」である華人が喜々として「植民者」のイギリス人役を演じるのである。独立記念日のイベントというものは、「植民者」からの解放を強調し、その土地の伝統文化を旧宗主国文化より優位におくことでナショナリズムを強化する機会である、と考えているポストコロニアル研究者が見たら、「既成概念」との違いに大いに驚くであろう。

ポストコロニアル研究においては、被植民者は「テンペスト」の登場人物である「キャリバン」に例えられることがある。プロスペロー達が難破した島には既に人（キャリバン、シコラックス、エアリエル）が住んでいた。プロスペローは島の支配者然と振る舞っているが、実は島の正当な領主はキャリバンであり、「旧世界」というのは異文化社会のことであるという解釈である。そして、キャリバン達は近代欧州植民地主義の政治イデオロギーの犠牲者である、という主張である。

しかし、現在のアジア、アフリカ諸国の大部分が植民地支配を経験したわけであり、地域によって各々異なる歴史、民族構成、宗主国との関係を持っている。1930年代までには、植民地及び旧植民地が全地球の地方面積の84.6%を占めていたという（ルーンバ、2001: 9）。ゆえに、全ての旧植民地を野蛮人キャリバンに例えるには無理があろう。

シンガポールに対して、あえて同じイギリス文学の登場人物の中に比喩を探すとすれば、筆者は「ピグマリオン」のイライザを推す[2]。

キャリバンはプロスペローに彼らの言葉を強制的に学ばされた。それゆえ、プロスペローに対して「悪口」をいい、「呪う」ことが出来るようになった、とキャリバンは言っている。キャリバンは自己主張をするためには、他者の言葉を用いなくてはならず、その束縛から逃れることは出来ない。イライザの場合は階級を上昇すべく、積極的にヒギンズから上品な話し方を習い、ヒギンズの教え方に抵抗しながらも、上流社会の話し方そのものには強い批判をすることもなく素直にその話し方を習得する。しかし、ショーの戯曲ではイライザは最後にはヒギンズのもとから離れていく。

シンガポールは、現在多少失速したとはいえ旧宗主国イギリスよりも経済成長率が高く、一人当りのGNPもイギリスを抜いた。経済的に言えば、まさに藍より出て藍より青し、の発展ぶりである。だが、果たして文化的にはイギリス植民地文化から脱し、独

立することが出来たのか。

イライザ（シンガポール）は上流社会の人々（西洋諸国）も貴族とみまごうほどの言葉遣いとマナーを身につけた。しかし、彼女の出身であるコヴェント・ガーデンの友達達（各エスニック・グループの伝統文化）はもはや彼女が誰だか認識できない。シンガポールは「他者」であったはずのイギリスを包摂してしまったことにより、シンガポール自身も、もはや「かつてのシンガポール」ではなくなっているのである。

歴史の「創造」とは、国民の帰属意識、アイデンティティを確認し、強化する作業でもある。独立後のシンガポールは旧宗主国の言語である英語を用いながら、自分の歴史をどのように創造してきたのか。

第二章　*The Singapore Story*（『リー・クアンユー回顧録』）における「植民者」に関する言説

The Singapore Story（以下『回顧録』）は独立時から1990年まで首相として国家建設、経済発展に携わってきたリー・クアンユーの回顧録である。今回扱う三つのテキストのうち、部分的にしろ明確にイギリス植民地支配を批判している記述があるのは本書だけである。政治家であるリーの『回顧録』は基本的には私的記録であり、もちろんそこには様々な政治的意図、プロパガンダが含まれているのは想像に難くない。

しかし、重要なのは、本書には、シンガポール人としてのリーの思想、生き方があらゆる場面で表明されている点である。彼の文体、歴史的事件に対してできるだけ客観的であろうとする態度、そして乾いたユーモアはイギリス教育の賜である。しかし、イギリス本国へ留学した時は、それまで手本としてきたイギリス人の現実の姿に触れ非常に失望したことを、様々な逸話の中で示している。多くの旧植民地エリートがそうであるように、旧宗主国の言語で旧宗主国の批判をするという、複雑な状況がそこにはある。

『回顧録』については既に筆者は書評を書いているので、ここでは内容の詳細には立ちらない。しかし重要な点は、この本でリーは、「旧植民地人」でありかつ「ディアスポラの中国人」であるという「二重に搾取された帝国主義の犠牲者」として西洋人から同情される、或いは犠牲者となることで自らを聖化することを拒否していることである。リーは、「我々は文化的な犠牲者でも聖人でもない、なぜならイギリスでもなく、中国でもない、シンガポールという『祖国』を持つ『シンガポール人』なのである」、と主張する。犠牲者と分類されることを拒否し続けることが、シンガポール発展への彼の原動力となってきたのではないか。本書はその彼の格闘ぶりを記したライフ・ヒストリーであり、同時に語り継いで行ってほしいシンガポール・サーガなのである。

この本では、リーは、植民地時代の人々の価値観や心理について具体的に語り、それによって現在のシンガポールの人々がいかに恵まれているかを若い世代に教え諭そうとするような語り口がみられる。

> 1945年以降に生まれた人たちには、英国が敗北した意味を理解することは難しいと思う。日本軍が来て42年2月15日に崩壊した英国植民地体制がかつてどのようなものだったか知らないからである。ラッフルズが1819年にシンガポールを東インド会社の貿易拠点として開発して以来、アジア人より白人の方が優れているという白人優越性が問われたことはなかったのだ。なぜそうなったのか私は知らないが、少なくとも私が学校に入る頃には、英国人は最大のボスであり、他の白人たちもボスだった。
>
> ……我々には白人に対する恨みなどの問題は全くなかった。政府や社会における英国人の優越的な地位は単なる世の中の事実だったに過ぎない。英国人は結局のところ世界で最も偉大な人たちだったのである。彼らは史上最大の帝国を築き上げ、領土は四つの海と五つの大陸にまたがっていた。我々はこれを学校で歴史の授業で学んだ（リー、2000: 35）。

ところが、その前提が日本軍の攻撃を受けたとき崩壊した。「シンガポールの英国植民地社会は英国人が優秀だという虚構とともに吹き飛んだのである（リー前掲書、2000: 35）」しかし、英国人を追い出した日本人は英国人よりも過酷な支配者となった。

> 白人は生まれながらに優秀であるという優越神話をうち立てることに成功したので、多くのアジア人は英国人に刃向かうことなど現実的でないと思い込んでいた。しかし、アジアの一民族である日本人が英国人に挑戦し、白人神話をうち砕いてしまったのである。ところが、日本人は我々に対しても征服者として君臨し、英国よりも残忍で常軌を逸し、悪意に満ちていることを示した。日本占領の三年半、私は日本兵が人々を苦しめたり殴ったりするたびに、シンガポールが英国の保護下にあればよかったと思ったものである（リー前掲書、2000: 35）

リーが想定する本書の読者はだれか。もちろん第一にシンガポール人、そして欧米の英語圏の読者を意識したものであることは、賛辞を寄せている人々がほとんど欧米人であることからもわかる。

植民地人としてのリーの視点がどこにあるのか、は日本軍の描写にも現れている。もちろん、日本軍は憎むべき敵として彼の人生に登場したのであるから、良い印象があろうはずはない。しかし問題にしたいのは、彼の日本人の描写の仕方に「オリエンタリズム」が見え隠れすることである。彼はイギリス人の視点を経由して、日本人を見ていることに注意すべきである。

日本軍は、ちびで、斜視で、だらしない格好をし、無精ひげの顔、野蛮な言葉を話し、がに股で歩く。それに対してイギリス国王の軍隊、とりわけスコットランド兵、グルカ兵の姿勢の良さ、規律が整っていることを誉めている。英国軍は戦いに敗れても、清潔な身なりで背筋をしゃんとのばし、隊列を整えて行進していく。英国海軍の船に乗って

いた経験があり親英家であった彼の祖父が、なぜ英国軍が「おかしな格好の日本人 the strange-looking Japanese」に破れたのかわからず、プリンス・オブ・ウェールズ号が撃沈された直後に死亡した話は、リーが好んで話す逸話である（前掲書、1999: 43）。

しかし、リー自身の容姿はどうみても英国人よりも日本人と似ている。共にシンガポールを軍事的に支配してきた英国軍と日本軍の二者を比較し、英国軍人の容姿の方に優位性を与えている自分の姿勢に全く疑問を抱かないことに、「クィーンズ・チャイニーズ」と呼ばれた植民地下の海峡華人エリートにおける文化的英国化の根深さに触れた気がする。

第三章　政府発行の年鑑にみる「植民者」に関する言説

シンガポール政府は毎年年鑑を発行しているが、その中にシンガポールの歴史を扱った章がある。わずか10ページほどの章だが、政府の公式な歴史観がこの数ページに代表されている。ここでは2001年の年鑑をシンガポール第二世代の歴史観として取り上げる（*Singapore 2001,* 2001: 30-39）。

まず、ラッフルズがシンガポールに来た理由を三角貿易の拠点を探していたから、としている。そしてその目算は見事にあたり、シンガポールは非常に優秀な植民地であることを証明した、とある（*Singapore 2001,* 2001: 32）。

この中で、植民地を連想させるような言葉は、多くはないが使用されてはいる。

たとえば、「イギリスはインドにおける彼らの王国を『拡大』していったが」、「イギリスはオランダからマラッカを『奪った』」、「イギリスの『所有地』としてのシンガポールの地位は2つの条約で規定された」等（*Singapore 2001,* 2001: 31-32）。

しかし、よく前後の文脈を読んでみると、「拡大」、「奪取」、「所有地」といった帝国主義的行動を匂わせるような言語の使用は、欧米どうしの競争、取引について語られる場面のみであり、それらの動詞がイギリスとシンガポールとの二者間関係で使用されることはない。

たとえば、「シンガポールがイギリスに支配された」、「イギリスがシンガポールを征服した」といったような直接的に植民地支配を記述した部分はない。ラッフルズはシンガポールに「上陸した（landed on）」のであり、シンガポールは直轄植民地に「なった（became）」のである。

唯一、「イギリス植民地主義（British Colonialism）」という言葉が出てくるのは、独立前に現与党が共産主義者と共同で「イギリス植民地主義と戦った」という箇所である（*Singapore 2001,* 2001: 34）。しかし、ここでも戦ったのはあくまでイギリスの「植民地主義」という「イデオロギー」であり、イギリスという「国家」ではない。日本に対する扱いは常に「国家」を対象としていることを考えると、より長期に渡り植民者として君臨したはずのイギリスに対する反感は、日本に対する反感よりもずっと弱いことがわかる。

つまり、ここでもシンガポールは日本による侵略の犠牲にはなったが、イギリスの犠牲にはなっていない、というメッセージが読みとれる。シンガポールが植民地として蹂躙されたのは日本によってであり、イギリスではない。

また、年鑑の持つ性質上、その時代によって微妙に歴史に関する記述が変化してくる。歴史に関する記述はここ数年間、大きな変化はないが細かな修正や追加事項等をみると、政府の多文化社会におけるエスニック・マイノリティに対する繊細な配慮が垣間見え興味深い。

たとえば、2001年の年鑑にはシンガポールのラッフルズ以前の時代について、それ以前の年鑑とは異なる部分がある。それはラッフルズ上陸以前のシンガポールに関する記述を3世紀の中国の文献やマレー語の文献に求め、中国語の固有名詞に英語のみでなく中国語表記も使用していることである。また、マレー語文献に関しても出来るだけ引用しようとしている。

だが三つのテキストのうち、ラッフルズ上陸以前の地域史に最も多く紙面を割いているにもかかわらず、つまり、この島には既に住民が居住し、生活していた地域だと述べつつも、イギリスの行為を「侵略」と表現した部分はまったくない。

本書は政府刊行物という性格上、政府の外交的・経済的政策の変化も如実に繁栄されている。たとえば、日本軍占領に関する記述は、90年代前半には大きなフォントで「日本軍侵略」という文字が踊っていたが、90年代後半からは、占領期の記述自体が「海峡植民地」の章の一部としてその最終段落の最後の数行に記述されるに止まっている。

> 平和と繁栄は日本軍が1941年12月8日未明にまだ眠っている街を爆撃したときに終わった。シンガポールは日本によって1942年2月15日に陥落し、昭南（南の光）と改名させられた。その後3年半、シンガポールは日本の支配下に置かれたのである（Singapore 2001, 2001: 32）。

ここでシンガポール人ではない外部の人間が疑問に思うのは、同日、日本軍は既にマレー半島コタ・バルに上陸したにもかかわらず、またそこに上陸した日本軍の南下によってシンガポールは陥落したにもかかわらず、コタ・バル上陸を日本の東南アジア侵略の開始とはせず、パール・ハーバー爆撃をもって開始としていることである。ここには、ただ単に欧米の歴史観の中で日本の東南アジア侵略を捉えているだけであるというよりも、マレーシア史とは明確な一線を引き、マレーシアとは独立した観点からシンガポール史を展開しようとする政府の姿勢が見て取れる。

第四章　高校歴史教科書にみる「植民者」に関する言説

最後に、事例として上げたいのは、歴史の教科書での植民地時代の扱われ方である。

ここでは幾つかある高校生向けのシンガポール史の教科書から *Singapore History, Come Alive!: For Young Singaporeans* を取り上げる。特に特徴的なのは著者が独立後に生まれた世代に属することである。つまり、生粋のシンガポール二カ国語教育政策で育った第三世代が、さらに若い第三世代、第四世代へ語る歴史観を代表している。

この本の中から、イギリスの植民政策、西洋人植民者に対する記述、使用している言葉を引用しながら、著者の「植民者」へのまなざしを分析する。注目したいのは、植民者も被植民者も等しく、「シンガポールの歴史を作った人々」として紹介されていることである。

ここでも、イギリス人に対する否定的な文言が少ない。イギリス人を始めとする西洋人は「支配者」としてではなく、交易をしにシンガポールにやってきて、シンガポールの経済発展に寄与した、という扱いになっている。イギリス人によるアジアの「支配」という記述がほとんどなく、日本の高校の歴史教科書では19-20世紀の章には必ず登場する「帝国主義」という言葉は一度も登場しないのである。

それでは以下に教科書の内容を分析していく。教科書の書き出しは「近代シンガポールの創設（Founding of Modern Singapore）」となっており、最初の文章は「あなたは近代シンガポールの創設者を知っていますか？ それは誰であろう、かの有名な歴史上の人物、トーマス・スタンフォード・ラッフルズ卿です。Do you know who the founder of modern Singapore is? He is none other than the famous historical man, Sir Thomas Stamford Raffles.」と記されている（Chua, 1997: 12）。

シンガポールでは、シンガポール人はだれもが移民の子孫であり、どの民族が「先住民」ということはなく平等である、としばしば強調される。これは、マレーシアがマレー人を「ブミプトラ」として優遇政策を実施していることと差異化をはかる意味あいが大きいと考えられる。

しかし、少なくとも、1819年にラッフルズがこの島に上陸した以前に全く人が居住していなかったわけではない。当時、既に1,000人ほどの人々が居住していたと言われる。

オラン・ラウト（漁労を生業とする船上生活者）、小さなプランテーションで農業に従事していた中国人、マレー人、がこの土地に済んでいたにもかかわらず、著者はラッフルズは「侵略者」ではなく、「近代シンガポールの創設者」として肯定的に扱い、賛美すらしている。この表現には、被植民者は植民者を歓迎しないもの、との「ステレオタイプ」に捕らわれている我々は戸惑いを感じるのである。

ここでは、ラッフルズの行為は、「到着した（arrived）」、「来た（came）」という中立的な言葉が用いられ、当時島の統治者であったトゥムンゴン（代官）（Teemnggong）と交渉し、ジョホール王国のスルタンの兄、トゥンク・フセイン（Tengku Hussein）と平和にイギリスと条約を結んだ、とある。

年表には「イギリスの旗がこの島に掲揚され、これが近代シンガポールの創設を記した。British flag was hoisted on the island. This marked the founding of modern

Singapore.」とある（Chua 前掲書、1997: 4）。

教科書はさらに、「シンガポールはなぜラッフルズによって選ばれた（chosen）のでしょう？」と問いかける。"chosen" という言葉は英語では特別の意味を持つ。そこには、神に選ばれし民、"Chosen People" という含意が感じられる。つまり、ラッフルズによって、選ばれし島、選ばれて名誉である、という解釈すら出来る文言である。穿った見方をすれば、「イギリス人に選ばれた」、という表現にアングロフィリアすら感じるのは読み込みすぎだろうか？

シンガポール人は全て移民の子孫である、という平等の扱いがされ、イギリス人が「支配者」という記述は全くないし、イギリス人が植民地政府を運営していたことも明示されていない。婉曲的な表現が使用されているだけである。「初期の移民の到着」という章では、それぞれの民族がシンガポールにやってきた理由が書かれているが、イギリス人の項は基本的には、「商人」がシンガポールを三角貿易（entrepôt trade）の中継地とすべくこの島にやってきたことが強調される。イギリス人支配に関しては、「何人かのイギリス行政官はシンガポールで政府の部局で働くためにやってきた」とさりげなく、一行あるだけである。

また「初期移民の貢献」という章では、各民族がどのようにシンガポールの発展に寄与したか、を述べ、最後の節に「ヨーロッパ人の貢献」として、貿易と行政制度、治安への貢献をあげている。具体的には、成功した貿易商、教会建築家、そして警察長官などの行政官の名前などがあがっている。

イギリス政府、という言葉は用いても、植民行政官としてのイギリス人を名指しにすることはなく、あくまでも「ヨーロッパ人」と広義の白人の中に「支配者」イギリス人も含めているところに注意したい[3]。

イギリス植民地統治に対しては概して好意的な論調である。最初はインド（これも英領インドのことだが）政府の管轄下になったのが、ヨーロッパ人商人達の苦情を受けて、イギリス植民池省の統治下に置かれた直轄植民地（Crown Colony）になってから行政制度がずっと効率的になったと誉めている。

ほとんど批判が見あたらない中、唯一の批判は小さな囲み記事にあった。「しかし幾つかの欠点もあった」と題されたコラムでは、「植民地政府が阿片を禁止しなかった」こと、「ヨーロッパ人はアジア人よりも優秀だと考えられており、高給、公的場所での優遇があった」ことの二点のみが上げられている。

大変に控えめな表現である。そこには「帝国主義者」対「彼らに蹂躙された被植民者」という、多くの旧植民地の歴史言説に見られる構図が全く見られない。

以上を見てくると、この三つの歴史記述においては、旧宗主国文化を「他者」の文化として捉えるのではなく、「我々」の歴史の中に取り込み、伝統文化の一部として認識していることがわかる。

このように植民地時代を全面否定しない姿勢は、例えば同じイギリスによる統治を経験したインドにおける、植民地支配を激しく攻撃する公的ポストコロニアルな言説・姿

勢、ナショナリズムの表象とは大きく異なる。

その理由はどこにあるのか？ 理由として考えられるのは、第一に、国民文化としてひとつの民族に優越性を与えないためである。多くの旧植民地が宗主国から政治的独立を果たした後の国家建設の柱としたのは、伝統的民族文化であった。ところが、多民族国家の場合はマジョリティ文化を国民文化して標榜することが多く、マイノリティの不満が爆発する場合がある。

おそらくシンガポールが多文化主義を掲げ、あらゆるエスニック・グループの起源を等しく「移民」として扱うのは、歴史的経緯から察するに、先にも述べたが、多分にマレーシアのブミプトラ政策を意識しているといえよう。

第二の理由として考えられるのは、イギリスとの間に直接的な独立戦争を展開しなかったことである。日本軍占領の三年六ヶ月が緩衝剤となり、むしろ支配が長かったイギリスへの憎しみを緩和してしまったようである。例えば日本に関する記述には、日本の「拡大」(expansion of Japan)、日本の近隣諸国への「進出」(Japan's advances on its neighbours)、その後は、日本がシンガポールを「侵略した invaded」、東南アジアを「征服した conquered」、シンガポールにおける日本の「占領 occupation」との表現が続く。戦没者記念塔は、「我が国が征服された時どのようなことが起こりうるのか、を我々に警告している」とある。つまり、日本軍による統治以前のイギリス人による統治は「征服」ではなかったということになる。

イギリスによる再占領は、「イギリス人の帰還（The British Returned)」と表現され、「占領」も「侵略」も「征服」という言葉も使われていない。唯一植民地的表現は「シンガポールは再びイギリスの統制下（under British Rule）におかれた」というものであった。本書の中で、"rule" という言葉が使用されたのはこの一カ所のみである。

ゆえに、この教科書では明らかに「植民地時代」は日本軍占領期を指し、最後に、日本軍からシンガポールを守れなかったことで、人々がイギリスの支配に対して疑問視するようになり、次第に独立への気運が高まったと結んでいるが、イギリス統治時代は「平和な」歴史の一段階として解釈されている。

第五章　三つの歴史記述の共通点と相違点

筆者が知る限りだが、シンガポール人による歴史関係の書籍の中では必ず、日本占領期は「三年六ヶ月」と正確に月まで数えているのに、イギリス「占領」期の 140 年（1819 年 1 月から 1960 年 9 月までのうち、1941 年 2 月から 1945 年 9 月までの日本占領期を除いた期間）に関しては正確な数字はおろか、例えば概算で約百年以上、という数字さえほとんど目にした記憶がない。これは非常に端的に、イギリス植民地時代はイギリス人に「征服されていた」、「支配されていた」という意識が、シンガポール人には薄いことを示す好例であろう。

今回扱った三つの事例においても、いずれもイギリス統治時代は平和な時代として扱

われている。

これらの事例から見ると、一部のポストコロニアル研究にありがちな、被植民者を植民者を呪う「キャリバン」として捉える傾向は、あまりにも単純化された、外部からの類型的被植民地者像であることがわかる。

ただし、本論では英語教育を受けてきた人々の語る歴史のみを扱っており、このような旧植民地文化に対する姿勢は、各民族語で教育を受けてきた人々（中国語教育を受けた華人、マレー語教育を受けてきたマレー系、インド諸語で教育を受けてきたインド系）に関してはこの限りではない。彼らの場合は、旧植民地政府や文化に対する強い反感はあるが、同時に各々中国文化、マレー文化、インド文化への帰属意識が強く、シンガポールへの帰属意識はかえって弱い場合が多い。

三つのテキストはいずれも、シンガポールのナショナリズムを醸造し、喚起しようとする意図のもとに書かれた記述であることは共通しているが、以上見てきたように「植民者」に関する記述は微妙に異なる。

リーの本は、独立運動世代の代表者が書いた本として当然ながら、イギリス宗主国に対する政治的対決姿勢、抵抗姿勢が最も明確にみてとれる。しかし、この本の特徴は、三つのテキストのうち、イギリスへの抵抗を最も格調高い英語、宗主国の言語で唱い上げているところである。ポストコロニアル的言説の矛盾を最も典型的な形で提示している。

政府の刊行物である年鑑は、国内のみならず国外の読者をも意識した記述となっており、シンガポール政府の公式な史観が記されている。ここで興味深いのは日本軍政期に関する記述の割合が他の二冊よりも極端に少ないことである。実際、年代順に年鑑を並べると、年を追う毎に日本軍政期に関する記述が少なくなっている。これは、シンガポール最大の交易国のひとつであり、最も多くの観光客が訪星する日本に対する外交的配慮があるのであろう。

それに対して、歴史の教科書は国内向けの教育目的であることから、日本の植民地時代に関する記述はかなり詳細にわたる。だが、この著者の所属する世代は、全く戦争を経験していない世代であり、日本の大衆文化を最も受容しているのもこの世代である。そのような理由から逆に多くのページを割いて、日本占領期について記述する必要があったともいえよう。日本軍の侵攻もコタ・バルへの上陸から日誌風に描写し、地図を添付して進路を日章旗と共に赤い矢印で記しながら、シンガポールへ日毎に迫る日本軍を臨場感を持って描いている。

この三冊は性格がそれぞれ異なり著者の世代も異なるのに、特徴的な共通点としては、先にも書いたが「帝国主義」の記述が全くないことである。特にイギリスによる「支配」という表現を直接的にはほとんど使用していない。

以下は、シンガポール中学初級教科書『現代シンガポール社会経済史』（英語）「第13章　日本占領下のシンガポール」の書き出しである。

> 123年間、シンガポールの人々は平和に暮らしていた。日本軍がシンガポールを攻撃したとき、人々は戦争の恐怖を体験しなければならなかった。日本軍が島を占領した三年半の間は、さらに大きな被害と困難な状況が待ち受けていた。この時期は、日本軍占領時代として知られている（越田、1990：24)。

以上の記述と、隣国マレーシアの中学2年生用の教科書『歴史の中のマレーシア』（マレー語）を比較すると興味深い。ここでは、イギリス、日本の両者による植民地支配について明言している。「第8章　日本によるマラヤの占領」の冒頭には次の記述がある。

> （我々は）今世紀初めに、イギリス人がマラヤ全域に勢力を広げたということをすでに知った。イギリス支配は1957年8月31日に終わった。この間、1942年2月から1945年8月までを除き、私たちの国はイギリスに支配された。この三年半の期間、私たちの国は日本によって支配され、この時期を日本占領時代と呼んでいる（越田前掲書、1990: 49）

また、今回取り上げたテキストでは、ラッフルズが上陸したときにすでに「先住民」がいたにもかかわらず、著者達はいずれも「先住民」を自分たちの先祖とは認めない。ラッフルズは「無人島」に街を作り、我々の先祖は「それ以降に」つまり「ポストラッフルズ」に移民してきたのである。そこには、「我々はゆえにイギリスの植民地支配によって蹂躙されたかわいそうな先住民・被植民者ではない」、というメッセージが込められている。

あくまでも交易上の好立地であったがゆえに、シンガポールはまず土地として、イギリスに選ばれたのであり、交易が発展していく過程で自分達の先祖が移り住んできた。そして、特にマレーシアとの分離後、自分たちは「選ばれし島の選ばれし民」となったのである。

だが、ここで注目したいのは、この選民意識、あるいは愛国心は、イギリス、日本、マレーシアという「他者」によって形成されてきたものである。果たして、シンガポールという地域から内発的に生まれた「シンガポールの伝統文化」はナショナリズムに貢献していないのか？

そこで、思い出して欲しいのは、ラッフルズを近代シンガポールの創設者としていることである。以前は「無人島」だったシンガポールに多民族がたどり着き、国家を形成した。近代シンガポールはラッフルズを創設者とし、ポストラッフルズ時代をその「歴史」とするなら、イギリス植民地時代文化こそが多文化社会シンガポールにとっての共通伝統文化、といえるのでないか。

ここに既存のポストコロニアル概念を覆す歴史観がある。この三冊においては、外部が規定する「伝統文化」と彼ら自身が規定する伝統文化との相違が際立って顕在化して

いるのである。この欧米人が押しつけようとする、「植民地の犠牲者」というオリエンタリズムを拒否する姿勢こそがシンガポールのポストコロニアル・ナショナリズムの表出といえるのではないか。

イライザはヒギンズの気まぐれの犠牲者ではない。自分で自分の道を選択しているのである。しかし、「独り立ちした」イライザの将来はかならずしもバラ色ではない。そこには、イギリス文化、ヨーロッパ文化を「他者」としてではなく、「我々」として取り込んできたことにより、アイデンティティ確立の困難さも生じているのである。

第六章　「イチゴ世代」の行方？

シンガポールの第三世代はマスコミによって「イチゴ世代」と名付けられている。見栄えはいいが、中身は柔らかい（芯がない）、という意味だそうである。

シンガポールは、政治的には独立したはずだが、皮肉なことに言語状況はますます植民地時代に回帰している。多民族社会のシンガポールにおいて英語圏文化が、再びエスニック・グループを越えた文化的紐帯となっている。特にイチゴ世代にはこの傾向が顕著である。そして、彼らのシンガポールへの帰属意識に関しては多くの問題が生じつつあり、多くの議論がなされている。

シンガポール人は物質主義者とはよく言われるが、最も消費文化にさらされているのは、若者層であり、成功とは "5C" を獲得すること、と言われる。"5C" とは、車（Car）、コンドミニアム（Condominium）、仕事（Career）、中央積立基金（CPF）、ゴルフクラブの会員権（Club membership）をいう[4]。シンガポールのキリスト教会においては、度々、六つ目の "C"（Christ）を忘れてはいませんか、と精神文化や倫理の重要性について警告を発しているほどである。

イチゴ世代には、英語、しかも米語を好み、特に華人のエリート志向の若者は、中国語は「めんどくさく」、「役に立たない」と学びたがらない傾向がある。

1999 年 12 月に発表された調査結果では、12%の華人の若者が白人に、10%が日本人になりたい、と思っているそうである。インド系の若者の場合は 15%が白人になりたいと思っている。マレー人の場合はマレー人以外になりたいという人は 10%に止まっているが、それでも 1 割はマレー人以外になりたい、ということである（*ST*, Jan. 15, 2000）。

こうなるとむしろ、人口比が変化するに従い、第一世代と第二世代、特にかつて「クィーンズ・チャイニーズ」と呼ばれシンガポールへの熱烈な愛郷心のもとに国家建設に携わった第一世代は、第三世代と同じシンガポール人であっても、その人口が減るに従い、シンガポール社会の中で「歴史的ディアスポラ」ともいうべき状況になってきている。

そして、現在のシンガポール社会が抱える最も重要な問題の一つは、第三世代の間で海外移住者が増加しているということである。

2002 年 8 月 9 日、シンガポールの第 37 回独立記念日のゴー・チョクトン首相の演説

には驚かされた。"Are you a stayer or a quitter?" と国民に呼びかけたのである。現在、ある程度豊かな経済状況を享受している諸国家のなかで、国民に対して「国に止まるのか、あきらめる（海外移住する）のか」、と問う首相が他にいるだろうか。ゴー首相の演説は期せずして、シンガポールにおいては優秀な人材の海外頭脳流出が如何に深刻化しているのか、を如実に表す結果となった。

資源の少ないシンガポールは人的資源の育成に国を挙げて取り組んでいる。シンガポールの過酷な受験戦争は日本の比ではなく、広く知られるところである。しかし、国策で育て上げたエリート達が必ずしも、シンガポールに止まるとは限らない。欧米の英語圏で学位を取ったエリート達には、条件が良ければ海外で就職し、そこに定住してしまう人も多い。実際、そのような人々は増加傾向にある。1984年には5,040人、1988年には11,770人以上が海外へ移住した（田村、2000: 256）。この数字は年を追う毎に増加しており、現在は2万人以上と言われる。

シンガポール人には元来、シンガポールを「故郷」とする意識、ナショナリズムが薄いと言われている。「落地正根」とは華僑が移住した地に根を生やし、その地で生きていくことを示した言葉である。多くのシンガポール華人が華僑の子孫であることを考えれば、シンガポールもまた彼らにとって一時的な仮住まいの土地であって、そこからまた移住していくことは「華僑」の「落地正根」の伝統にかなった行為、といえなくもない。

しかし、たとえば、マレーシアやインドネシアの華人の多くが、それらの地を「故郷」と認識し、イスラーム文化が優勢な土地にもかかわらず、海外留学を終えた後はマレーシアやインドネシアにもどってきていることを考えるとき、シンガポールの頭脳流失傾向は突出している。特に、第三世代の海外移住者の増加が著しい。

その理由の一つが英語を公用語にし、教育媒体としていることから、シンガポール人は欧米英語圏文化になじみ、それらの国へ留学する人々も多く、移民することに抵抗が少ないからなのではないだろうか。

英語を公用語にしてきたことで急速な経済発展を遂げてきたシンガポールだが、英語によって生活世界が形成されてしまい、物理的にはシンガポールに居住していながら、ライフスタイルは英語圏文化に属しているというアイデンティティのねじれ現象が生まれている。

ひるがえって、リー・クアンユーの留学時代はどうであったのか。当時のマラヤ、シンガポールと本国のライフ・スタイルは非常に異なっていたし、実際、彼は大きなカルチャー・ショックを受け、ホームシックになったことを『回顧録』の中では詳細に描いている。彼の心にシンガポールに対する帰属意識・愛郷心が芽生えたのは、まさにこのイギリス留学中の経験であった。

しかし、インターネット、テレビ、音楽、雑誌など多くの視覚・聴覚メディアが溢れる現在、第三世代にとってはイギリス留学への抵抗は少ない。英語圏文化・ライフスタイルを既に共有していることが、彼らに移住を容易にしている。また、イギリスを初め

とするヨーロッパ諸国自体が多文化社会へと変容し、異文化どうしで異種混淆が進んでいることが、シンガポール人を海外の英語文化圏に引きつけるプル要因となっているのであろう。

シンガポール側からのプッシュ要因としては、その統制的な社会体制にある。英語教育を受けたエリートほど、英米の自由主義的教育、個人主義的価値観を身につけていく。それらの人々にとっては、本国の社会体制が窮屈に感じられてしまうのは英語を教授媒体とした教育制度の大きな矛盾である。

リーが『回顧録』の中で、ことさらに植民地時代の生活や独立への苦難の道について紙面を割いているのは、単に自己が達成した業績を自慢するのではなく、このように第三世代の間における愛国心の薄さに対して国家存亡への危機感を感じているからではないか？

ナショナリズムに関してはベネディクト＝アンダーソンによる、「ナショナリズムとは、その国のために死ねるか、である」が、人口に膾炙した定義である。そして、この言葉をそのまま使用しているのが、第三世代による教科書であることに事態の深刻さが見て取れる。

> 若いシンガポール人が "5C" を獲得したいという情熱は理解できる。しかし、国家（特に都市国家）の基本的真理は、国民の愛国心に宿っているのである。もし、一人一人のシンガポール人が熱意を持って「喜んで国のために死ぬ」と言えない限り、シンガポールの存続は疑問視されてしまうであろう。
>
> 愛国心は市民によって育まれるものであり、そのひとつの方法としては、歴史をよく知ることである。それが［国のために］戦う動機づけとなるのである。（Chua, 1997: 裏表紙）。

先になぜこれほどまでに「三年六ヶ月」を問題にするのかと問うたが、「国防」と「過去の体験の共有」という観点から見ると、日本軍の占領体験は近過去であり、現在生存している祖父母、父母が体験してきた生きた歴史ということで、現在のシンガポール人にとってはイギリス植民地体験よりも生々しく共有する過去であるのは当然といえよう。換言すれば、シンガポールが愛国心を強化しようとすればするほど、日本軍政下の出来事は繰り返し話される「神話」となり、シンガポールが存続する限り強化されていく物語のひとつとなっていくことになる。

ま と め

以上見てきたように、シンガポールにおいては、植民地文化を完全否定するのではなく、植民者という「他者」をむしろ積極的に歴史の中に取り込むことにより、「他者」をもはや自己の一部として消化してしまい、その結果、「我々」は「他者」の犠牲者で

はない、というポストコロニアル・アイデンティティを形成していると考えられる。

だが、このようはポストコロニアル・アイデンティティの形成が、同時にシンガポールへの物理的愛郷心を脆弱化してしまっている側面もあり、深刻な問題となっている。

あるいは、昨今の国際社会において、急速な多民族化・多文化化が進行するにつけ、もはや21世紀には国家というものはアイデンティティの拠り所として第一義的な地位から滑り落ちつつあり、言語、宗教、ジェンダー、趣味といった集団のカテゴリーがそれにとってかわるようになるのか。そして、シンガポール社会はその先駆的な実験場となるのだろうか。この件に関しては改めて、稿を起こし議論したいと考えている。

注

(1) Once upon a time there were only trees
And a lion or two enjoying the breeze
Then a boat arrived one sunny day
And the human beings were here to stay...
"Rasa Sayang" By Dick Lee

(2) キャリバンとイライザについては、ジェンダーの問題に関しても、おもしろい議論ができようが、紙幅の関係もあり本論では論じない。

(3) ただし、この歴史教科書の中では扱いが曖昧なエスニック・グループがある。それは「ユーラシアン」である。この教科書の分類によれば、ヨーロッパ人の血を引くユーラシアンは、基本的には「ヨーロッパ人」として分類され国家建設に貢献したとされるが、日本占領下の項でのみ、あえて「ユーラシアン」という単語を用いて、彼らがヨーロッパ人と「似ていたので」処罰されることがあった、としている（Chua, 1997: 59）。

しかし、当事者であるユーラシアンから見ると、彼らはヨーロッパ人からは常に「その他」として差別された存在であった。例えば、英領シンガポールでは、1924年から1961年にThe Corad Clarke Cupというクリケット試合が毎年開催されていたという。その試合は「ヨーロッパ人（Europeans）」と「その他（The Rest）」との間で争われ、ユーラシアンはその祖先がヨーロッパ人であるにもかかわらず、「その他」チームに分類されていたのである（Tessensohn, 2001: 100-1003）。

(4) CPF（Central Provident Fund, 中央積立基金）とは、勤労者が定年退職後、また不慮の事故などで働けなくなった場合に経済的な保証をするため、被雇用者と雇用者が、給与に対する一定の割合を積み立てる制度として、1955年に創設された。現在では、月収200シンガポールドル以上のシンガポール国内の勤労者や外国船籍の船に乗務するシンガポール人などが加入の義務を課せられている。http://www.clair.nippon-net.ne.jp

参考文献

ヴォーン、アルデン・T、ヴォーン、ヴァージニア・メーソン、『キャリバンの文化史』、青土社、1999年。

奥村みさ、「リー・クアン・ユー『シンガポール物語：リー・クアン・ユー回顧録』、『国際学

論集』No. 43、上智大学国際関係研究所、1999 年 1 月所収：81-92 頁。
越田　稜編・著、『アジアの教科書に書かれた日本の戦争（東南アジア編）』、梨の木舎、1990 年。
ショー、バーナード著、倉橋　健・喜志哲雄訳、『ベスト・オブ・ショー　人と超人・ピグマリオン』、白水社、1993 年。
田村慶子、「9 章　シンガポールの開発政治」、大阪市立大学経済研究所監修、『アジアの都市 3. クアラルンプル／シンガポール』、日本評論社、2000 年所収：241-264 頁。
リー・クアンユー著、小牧利寿訳、『リー・クアンユー回顧録［上］』、日本経済社、2000 年。
The Singapore Story: Memoirs of Lee Kuan yew, by Lee Kuan yew, Prentice Hall, Singapore, 1998.
ルーンバ、アーニャ著、吉原ゆかり著、『ポストコロニアル理論入門』、松柏社、2001 年。
Chua May Ling, Diana, *Singapore History Come Alive!: For Young Singaporeans,* Prestion, Singapore, 1997.
Singapore 1997, Ministry of Information and the Arts, Singapore, 1997.
Singapore 1999, Ministry of Information and the Arts, Singapore, 1999.
Singapore 2001, Ministry of Information and the Arts, Singapore, 2001.
Tessensohn, Denyse, *Elvis Lived in Katong: Personal Singapore Eurasiana,* Dagmar Books, Singapore, 2001.
"To be or not to be Chinese", *The Straits Times,* Jan. 15, 2000.